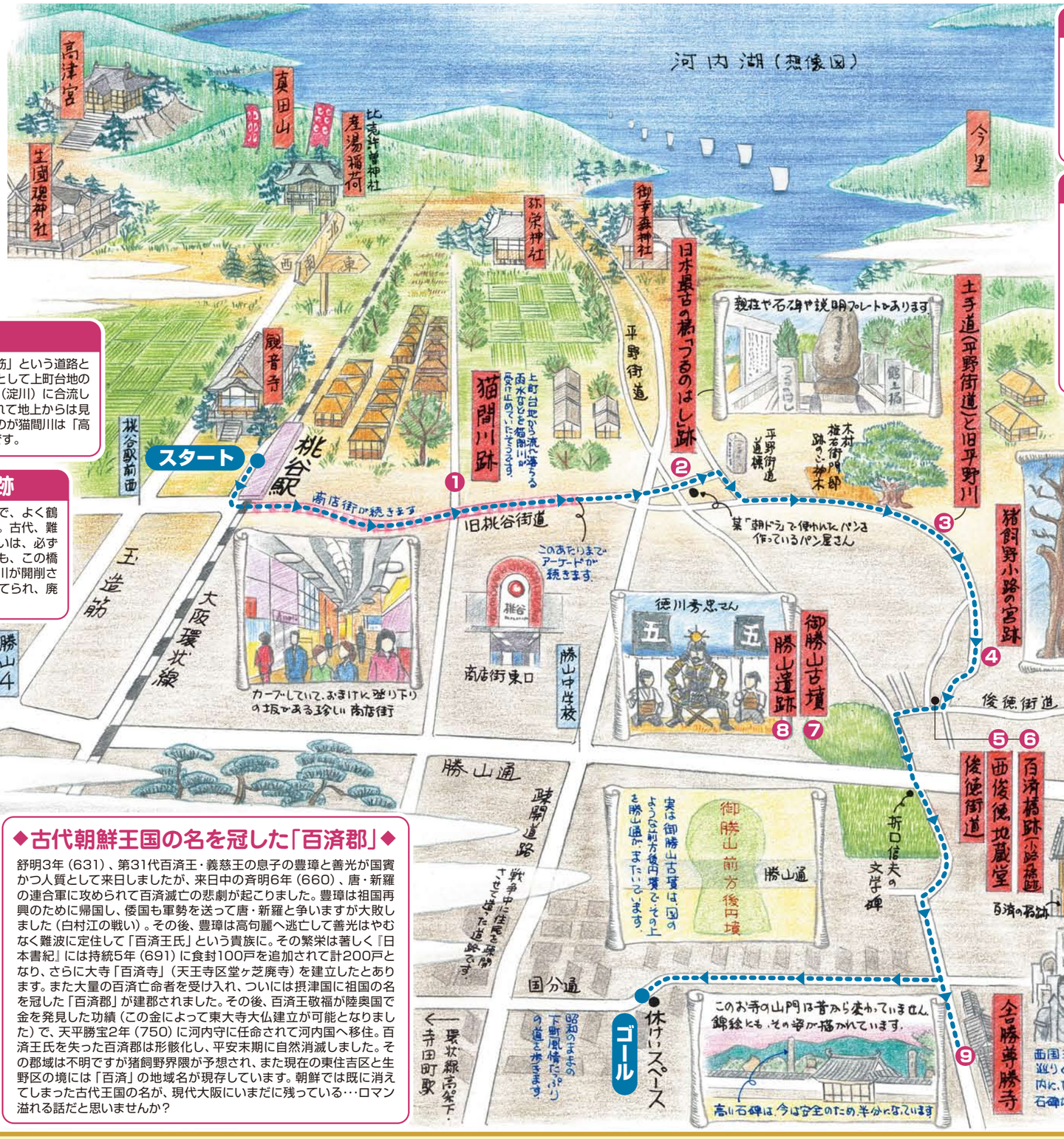
大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪あそ歩 OSAKA ASOBO®

河内湖を臨んだ生野の古代豪族たち
～俊徳街道から御勝山古墳まで～

かつて上町台地の東側には河内湖が広がっていました。それは大阪湾、瀬戸内、大陸にまで繋がり、おかげで当地には数多くの交易船が行き交い、猪飼野や百済川(平野川)など、渡来人ゆかりの土地であったことを示す地名や物語がいまも色濃く残っています。古代豪族たちの輝かしい国際交流の痕跡を訪ねます。



①猫間川は高麗川だった？

東西に列なる桃谷商店街の途中で、南北に通った「猫間川筋」という道路と交差します。猫間川というのは、長池、桃ヶ池などを水源として上町台地の東側を北上して、旧大和川水系の平野川に流れ込み、大川（淀川）に合流していた川でした。昭和32年（1957）に完全に暗渠化されて地上からは見えませんが、現在も道路下には川が流れています。面白いのが猫間川は「高麗川（こまがわ）が訛ったもの」という由来説があることです。

②日本最古の橋「つるのはし」跡

文献上、日本最古の橋です。河内湖は葦が生い茂る湿地帯で、よく鶴が飛来したので、いつしか「つるのはし」と呼ばれました。古代、難波津に上陸して、そこから陸路で飛鳥（都）方面に進むさいは、必ず平野川（百済川）を渡る必要があり、数多くの渡来人たちも、この橋を渡ったと推測されます。大正12年（1923）に新平野川が開削され、不要となった旧平野川は昭和15年（1940）に埋め立てられ、廃橋となりました。

③土手道（平野街道）と旧平野川

現在は道路となっていますが、かつてはここは土手道（平野街道）で、傍らには旧平野川が流れていました。旧平野川は旧大和川の支流で、古代には「百済川」と呼ばれ、猪甘津から飛鳥方面に向かう水運としても利用されたと考えられています。もし猫間川が高麗川と呼ばれているのが本当であれば、かつては上町台地の東には百済川と高麗川が、仲良く並流していたことになります。

◆渡来人ゆかりの地名「猪飼野」◆

当地界隈は、かつて「猪飼野」と呼ばれました。猪飼野の地名の起源は非常に古く、『日本書紀』によれば仁徳14年（326）に「為橋於猪甘津即号其処曰小橋也」（猪甘津に橋を為す。曰く小橋という）とあります。猪甘（猪飼・猪養）の猪とはイノシシではなく、渡来人が大陸から持ち込んだブタのことで、当地は朝廷に献上するブタを飼育した猪飼部の集住地でした。猪飼部は飛鳥時代以降、殺生を禁ずる仏教が普及したので廃れたようです。その後、室町期は四天王寺領で「猪養野庄」（『天王寺金堂舎利講記録』）と呼ばれ、近世以降は猪飼野村と呼ばれました。1500年に渡る歴史的地名でしたが、昭和48年（1973）、国が定めた住居表示施行によって桃谷、勝山といった町名となりました。しかし由緒ある地名や史跡・地車などの文化を伝承しようと地元住人は猪飼野保存会を結成。猪飼野新橋や猪飼野橋停留所など猪飼野の地名は随所に継承されています。

◆古代朝鮮王国の名を冠した「百済郡」◆

舒明3年（631）、第31代百済王・義慈王の息子の豊璋と善光が国賓かつ人質として来日しましたが、来日中の斉明6年（660）、唐・新羅の連合軍に攻められて百済滅亡の悲劇が起こりました。豊璋は祖国再興のために帰国し、倭国も軍勢を送って唐・新羅と争いますが大敗しました（白村江の戦い）。その後、豊璋は高句麗へ逃亡して善光はやむなく難波に定住して「百済王氏」という貴族に。その繁栄は著しく『日本書紀』には持統5年（691）に食封100戸を追加されて計200戸となり、さらに大寺「百済寺」（天王寺区堂ヶ芝廃寺）を建立したとあります。また大量の百済亡命者を受け入れ、ついには摂津国に祖国の名を冠した「百済郡」が建郡されました。その後、百済王敬福が陸奥国で金を発見した功績（この金によって東大寺大仏建立が可能となりました）で、天平勝宝2年（750）に河内守に任命されて河内国へ移住。百済王氏を失った百済郡は形骸化し、平安末期に自然消滅しました。その郡域は不明ですが猪飼野界隈が予想され、また現在の東住吉区と生野区の境には「百済」の地域名が現存しています。朝鮮では既に消えてしまった古代王国の名が、現代大阪にいまだに残っている…ロマン溢れる話だと思いませんか？

④猪飼野小路の宮跡

大きな椋（むく）の木と猪飼野小路の地車（だんじり）小屋、日露戦争慰霊碑があります。かつて猪飼野には猪飼野村と分郷の小路村の2つの村落があり、ここに小路村の宮がありました。しかし明治18年（1885）の淀川大洪水で流され、現在は御幸森天満宮に合祀されています。『令集解』によれば古代には大路、中路、小路といった街道が整備され、小路村の村名はその名残と推測されています。小路の宮を南に下ると四つ辻に出ますが、その東西道が有名な俊徳街道（天王寺～河内～大和）です。

⑤俊徳街道・西俊徳地蔵堂

能「弱法師」（よろぼし）ゆかりの街道で、「弱法師」とは河内国の高安通俊の子・俊徳丸のことです。通俊は他人の讒言で我が子・俊徳丸を追い出したことを後悔し、天王寺西門でお布施を行いましたが、そこで盲目の乞食で「弱法師」となった俊徳丸と再会します。しかし通俊は俊徳丸の変わり果てた姿に絶句し、誰もいない夜に会いに行きます。通俊は弱法師に「天王寺西門から難波津に沈む夕陽を拝めば、どんな者でも極楽浄土に往生できる」と諭すと、盲目のはずの弱法師は「ああ夕陽が見えます、見えます。」と涙を流して喜び、その狂おしい哀れな様子に、ついに通俊が父と名乗りを上げます。すると弱法師は我が身を恥じて逃げようとしますが、通俊は弱法師の手をとって、一緒に故郷の河内国高安へと帰っていきました。西俊徳地蔵堂は2人が休んだ場所といい、宝暦年間（1751～1763）頃に祀られたといいます。

⑥百済橋跡（小路の橋跡）

かつて西俊徳地蔵前には旧平野川に架けられた「百済橋」（小路の橋とも呼ばれました）がありました。川は埋め立てられ橋も姿を消していますが、昔、子どもたちが川に飛び込んで下流の「つるのはし」まで泳ぎ、また土手道を駆け上ってくるという遊びをしていたといいます。

⑦御勝山古墳

もとは岡山と呼ばれていましたが、大坂の陣の際に徳川秀忠が当地に陣を置いて戦勝したことから御勝山と呼ばれるようになりました。現在は前方部が破壊されて後円部のみですが、本当は墳長南北約112メートル、東西約55メートル、高さ約8メートルの前方後円墳で、5世紀頃に造られました。当時、古墳は河内湖に面していて、さらに「倭の五王」（讃、珍、済、興、武）が東晋や宋との朝貢を繰り返した時期と重なります。中国、朝鮮の使節は河内湖から当古墳を眺めて上陸し、外交や交易などを盛んに行ったと推測されます。古墳の被葬者は不明ですが、渡来人たちと国際交流した港の有力者だったかも知れません。

⑧勝山遺跡

平成2年(1990)に御勝山古墳付近を調査したさいに、縄文時代前期（紀元前5000年頃）の土器片が発見されました。それまでは縄文中期（紀元前4000年頃）の森ノ宮遺跡（中央区）が大阪市内最古の縄文遺跡だったので、画期的な発見でした。出土した土器は滋賀の粟津貝塚土器、愛知の天神山土器との関連性も指摘され、当時の縄文人たちの交易・交流（当時も勝山は河内湖に面していました）などが窺える貴重な資料として注目されています。7000年前には縄文人が住み、1500年前には古墳が作られ、400年前には大坂の陣の主戦場となった･･･なんとも雄大な歴史ロマンを感じます。

⑨舎利尊勝寺

古代、当地には生野長者がいて、その子供が3つの仏舎利を口から吐き出し、聖徳太子がそれを舎利尊勝寺、四天王寺、法隆寺に祀ったといいます。四天王寺、法隆寺と並ぶほどの大寺を建立できた生野長者とは一体、何者なのか？･･･よくわかっていませんが猪甘津に近く国際貿易などで富み栄えた豪族かも知れません。現在は黄檗宗寺院です。

【注意事項】この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】大阪コミュニティ･ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局　電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。　http://www.osaka-asobo.jp　または　大阪あそ歩　でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。